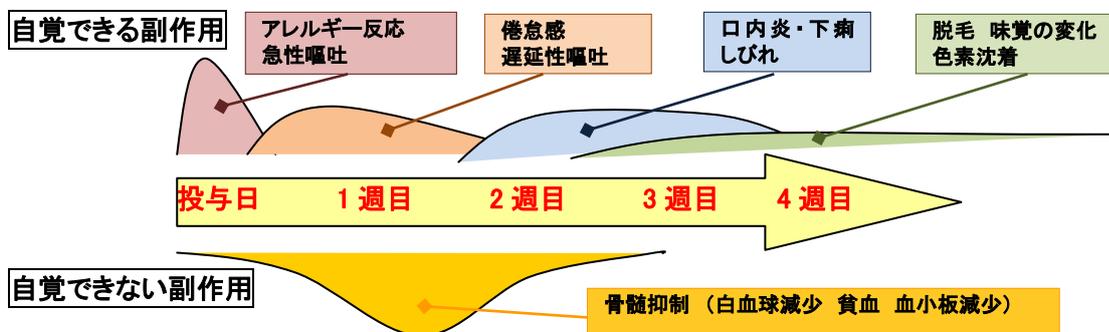


外来化学療法室では、医師・看護師・薬剤師・看護助手など様々なスタッフが患者さんの治療にあたっています。今回は、副作用の考え方と発現時期について紹介します。

☆抗がん剤の副作用について～その2～副作用の発現時期について☆

それぞれの副作用の症状は、抗がん剤投与後すぐに起きるものから数日後、数週間～数ヶ月後に起きるものまで、発現時期は症状によって様々です。そのため、治療をしていない休薬期間でも副作用症状には、注意する必要があります。また、副作用症状には、自覚できるもの（嘔気・口内炎・下痢）と自覚できないもの（白血球減少などの臨床検査値異常）とがあります。

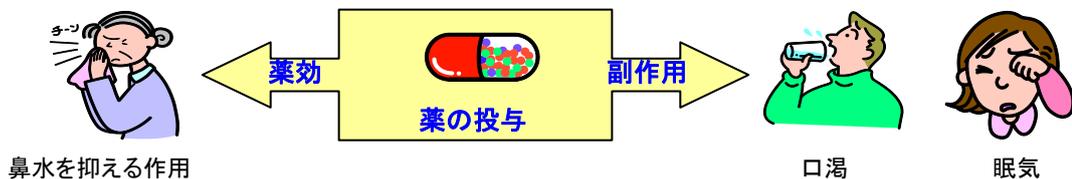
下記の図に副作用のおおよその発現時期を表しますので参考にしてみてください。



副作用対策では、いかに副作用を少なくするか、出現した場合でも、いかにひどくならないように対処できるかが重要です。そのためには、治療ごとの副作用の現れ方や発現時期などを理解しておき、症状が出現したときに早めに対処できるようにしましょう。（個々の治療スケジュールによって出現時期は異なる場合もあります。）

☆副作用とは(主作用と副作用との関係)☆

体の中に吸収された薬は、体の中でいくつかの作用をします。例えば、その作用が人にとって望む作用であれば主作用（薬効）、望まない作用であれば副作用となります。ですから、副作用が全く無い薬は、一般的には考えられません。



（例えば、風邪の時に服用する抗ヒスタミン剤は、鼻水を抑える作用は主作用ですが分泌液が抑えられて起こる口渇や眠気は副作用となります。）

抗がん剤では、血液をつくる骨髄細胞、消化管の粘膜細胞や毛髪の毛根細胞など活発に分裂をしている正常細胞にも影響するため、比較的副作用症状が出現しやすいです。どんな副作用症状があるかを知っておくことは、治療をする上で大切です。

各治療の副作用は、「抗がん剤治療を安心して受けるために」、「各薬剤のパフレット」などのパフレットも参考にしてください。パフレットが必要な方は、外来化学療法室で配布していますのでお声かけ下さい。